

注)この資料はオリジナルファイルのePubファイルをPDFファイルを出力したものです。

オリジナルはこちら→<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2010/20100623.html>

# 日本化学会の論文誌事業の現況とXMLの活用

2010年度第1回SPARC JAPANセミナー

「学会の仕事とその経営を知る」

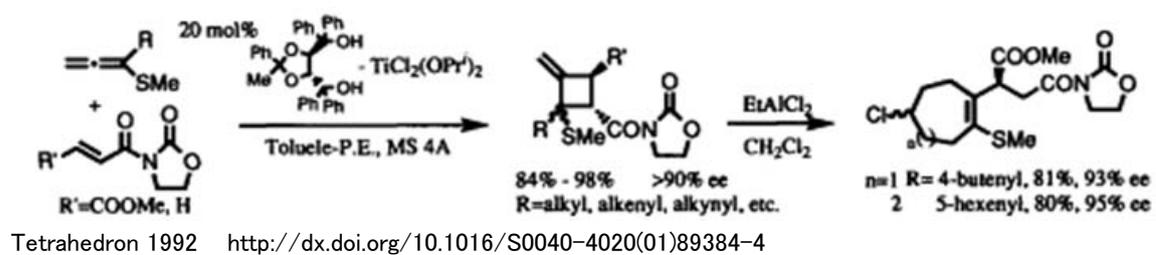
2010年6月23日(水)

日本化学会 学術情報部 林 和弘

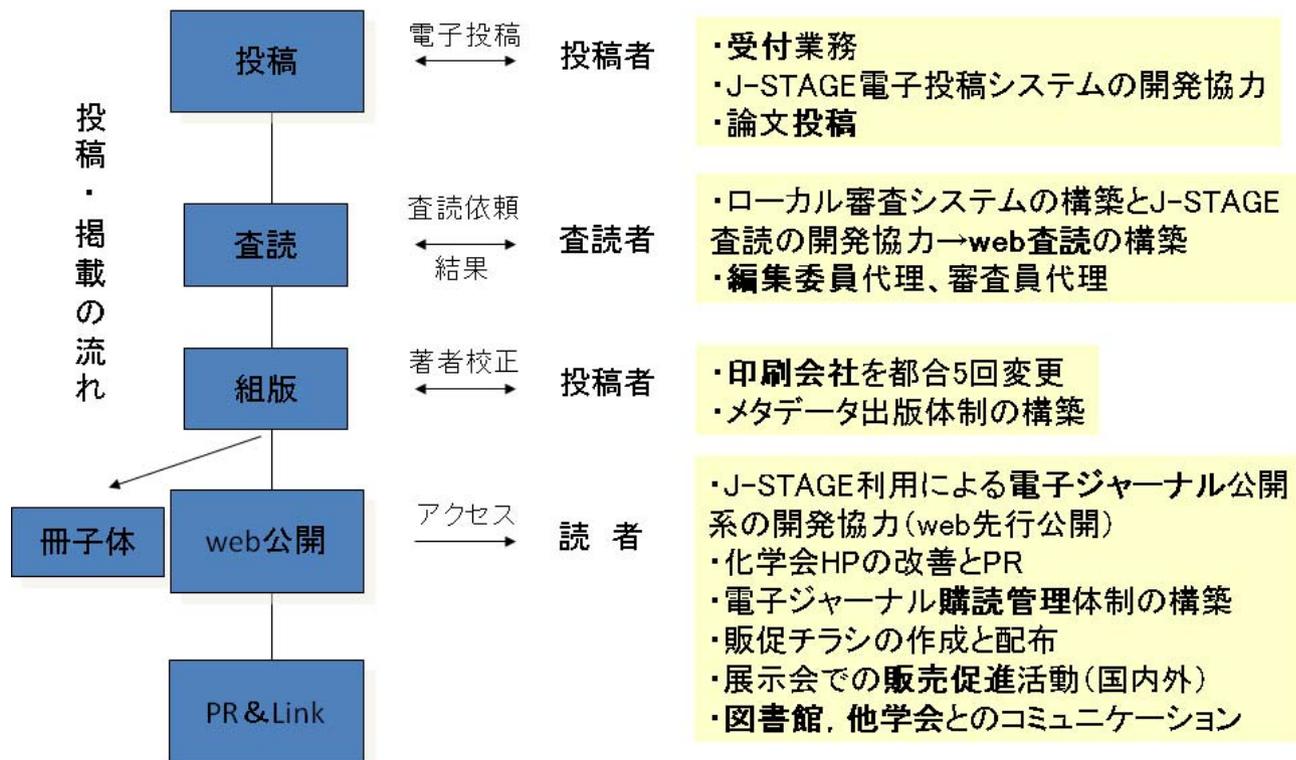
hayashi@chemistry.or.jp @hayashi\_csj (twitter)

# 1. はじめに

## A) 自己紹介



# 論文誌の電子ジャーナル化



## 2. 日本化学会の論文誌の現在

### A) 国産自力開発運用

#### (1) BCSJ & ChemLett

Bulletin of the Chemical Society of Japan 1926年発刊、2007年に Vol. 80 を迎えたわが国を代表する化学系英文本論文誌

IF(2008)=1.677

<http://www.csj.jp/journals/bcsj/>

Chemistry Letters 1972年創刊の速報誌。受付からweb公開まで平均60日を切る世界最速レベルの一般化学誌

IF(2008)=1.478

<http://www.csj.jp/journals/chem-lett/>

参考: General Chemistry JournalのトップジャーナルのIFは10前後(レビュー誌を除く)

#### (2) 出版費削減(2001)、電子投稿査読(2003)、電子ジャーナル購読(2005)、オープンアクセス対応(2005)、学協会合同PR(2007)、XML出版(2009)

- 出版費削減(2001)、組版経費を約3割減し、かつ、電子ジャーナルサービスを充実  
(情報の科学と技術, 2002, 52, 2, 94-99)
- CrossRef, 電子投稿査読(2003)、J-STAGEと自力開発で開発費をほとんどかけずに実現  
(情報管理, 2003, 46, 6, 373-382) (情報管理, 2005, 48, 2, 87-94)
- 電子ジャーナル購読(2005)、電子ジャーナル購読ベースの事業に転換、現実的なサイトライセンス  
(情報の科学と技術, 2006, 56, 4, 188-192)
- オープンアクセス対応(2005)、学会系の化学誌としては、世界的にもいち早い対応  
(情報管理, 2009, 52, 4, 198-206)
- 化学会PR(2004)→学協会合同PR(2007)、SPARC JAPANの支援も得ながら学協会合同で取り組む  
( SPARC Japan news letter, 2009-02, 1, 1-4)
- XML出版(2009)、後述

# 日本でも国際的に遜色ない 電子ジャーナルサービス

Electronic Submission  
and Reviewing



Full-text  
searching



Advance view  
on the web



IP and ID based  
limitation and  
Pay-Per-View service



XML-based Publishing

Archives from  
the 1<sup>st</sup> issue



Linking from  
Google Scholar

Linking to CA  
(Database)



Linking to other journals



COUNTER  
STATS



Email alerting  
RSS2.0

## B) 海外出版者提携

### (1) TCR The Chemical Record (国内学協会横断)(2001-)

国内8学協会合同で編集するレビュー誌(パーソナルアカウンツ)。出版はWiley→Wiley-VCHへ

<http://www3.interscience.wiley.com/journal/72515006/home>

IF(2008)=3.477

### (2) Chemistry – an Asian Journal (アジア学会横断) (2006-)

アジアの化学会が連合して編集組織を構成([http://www3.interscience.wiley.com/journal/112140232/home/2451\\_society.html](http://www3.interscience.wiley.com/journal/112140232/home/2451_society.html))。

出版はWiley-VCH

<http://www3.interscience.wiley.com/journal/112140232/home>

- ヨーロッパ化学会連合で1995年に創刊したChemistry – an European Journal(<http://www3.interscience.wiley.com/journal/26293/home>)のアジア版
- Wiley-VCHと日本、中国が実質的に主導
- これまで日本化学会でもアジア誌創刊、もしくはアジア的なジャーナル名へ変更する議論はしばしば行われていたが、主に外交、政治的な観点から実現には進まなかった→Wileyが間に入ることで結果的に実現
- 強力な編集者の存在Peter Goelitz)
- アジアでの日本の指導力確保のため: Chairman に野依先生を
- 国内の単一な活動、一国会ごとの活動を越えた世界へ

First IF(2008)=4.197 日本から出版する化学誌としてはトップジャーナルに

## C) 両者どちらが良いのか？

### (1) 一定の価値を与えた学術情報フローを生み出し続けるために

- 自前で発行し続けるのが良いか、商業出版社と組むのが良いかの岐路に立っている
  - 伝統と手作りの「青梅マラソン」 vs 新興大規模「東京マラソン」の構図
- 学会論文誌事業で何が一番大事か
  - その時の科学コミュニティの価値観で論文を判断し、取捨選択して世に広めること
  - 旧来のパラダイムで言えば、刷って図書館に納本するまでの情報の管理＝機関レポジトリが次に目指しているところの1つ
  - “Why Hasn’t Scientific Publishing Been Disrupted Already?”  
(scholarlykitchen, 2010/01/04) <http://scholarlykitchen.sspnet.org/2010/01/04/why-hasnt-scientific-publishing-been-disrupted-already/>  
業績評価「designation」としての学術論文誌の役割が変化するのは数年単位ではなく、数十年単位になるだろう
- 全てを商業出版社に委託するのは学会の存在意義に関わると見る人も多い

### (2) 学会のメリット、会員に対するメリットとは

名をとるか実をとるか？

- 出版者に委託することで学会の財政が潤うならば、それは学会にとってメリットでは？
  - 財政を潤すようになるためには出版社とのtough negotiation
  - 日本の学会出版で海外の商業出版社と渡り合っているのはどれだけあるか？
- 自前と委託、両スタイルをキープできるならそれも悪くない Hybrid
  - 一度手から離れたら元に戻すのは難しいだろう
  - 相手の手の内が分かれば委託の際もより有利な交渉へ
- 両スタイルそれぞれ決して楽観できない状況
  - 業界としてはポストビッグディールモデル次第？
  - 「ビッグディールは大学にとって最適な契約モデルか？」 尾城孝一  
<http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/html/5/fa1.html>

**学会として、決めるのは会員であり、会員が必要とする雑誌を作り続ける**  
(情報の科学と技術, 20090101, 59, 1, 13-17)

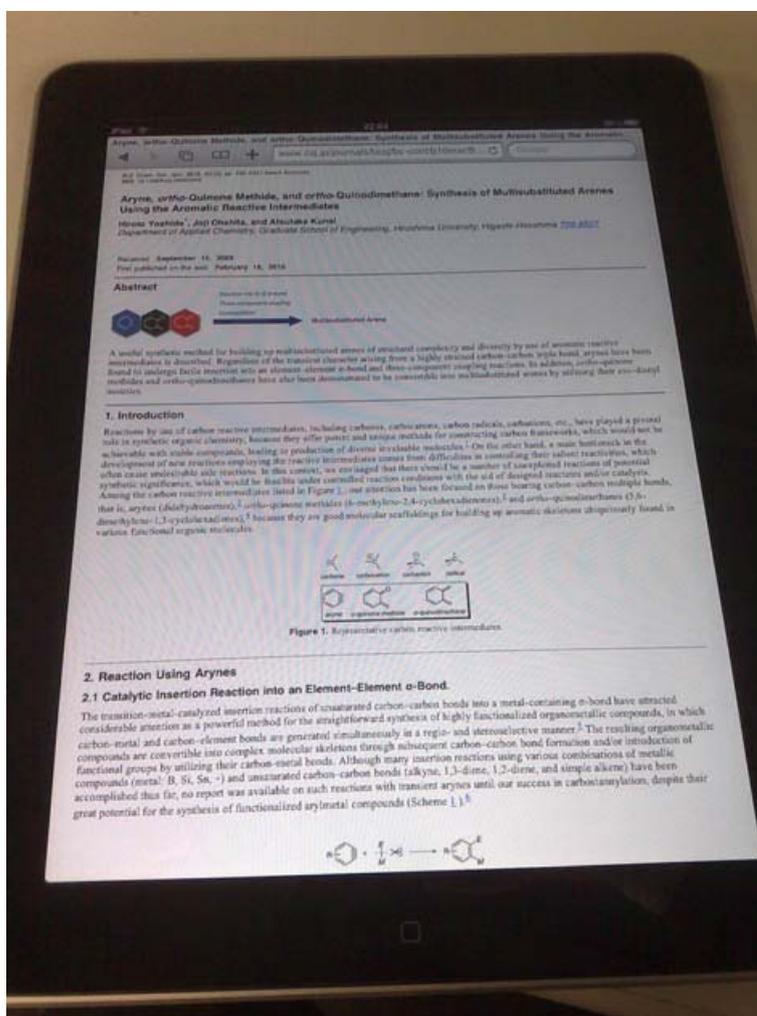
### 3. XML利用の実際、可能性から見る学会の将来

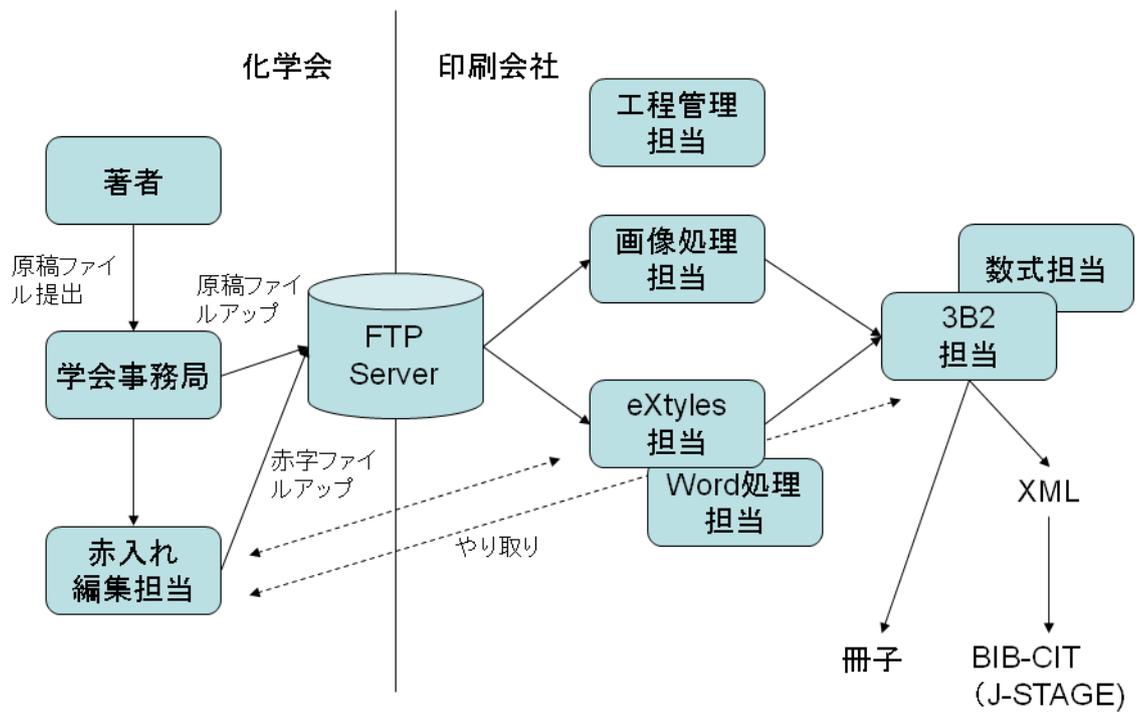
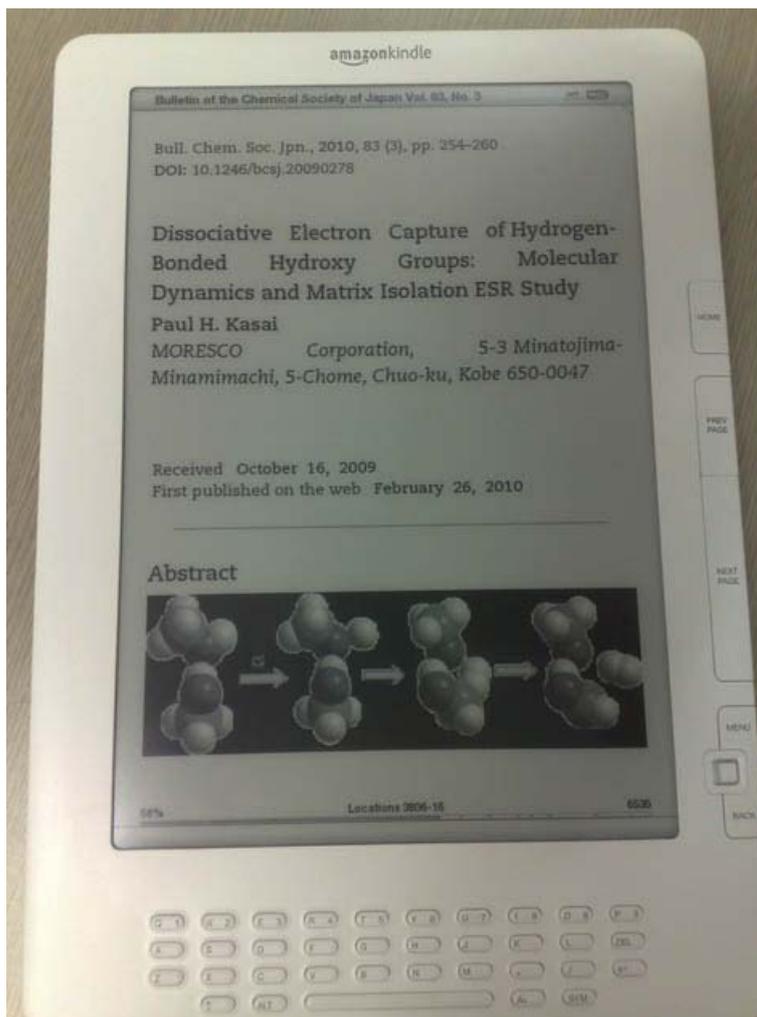
#### A) XMLベースの出版フローの確立と課題

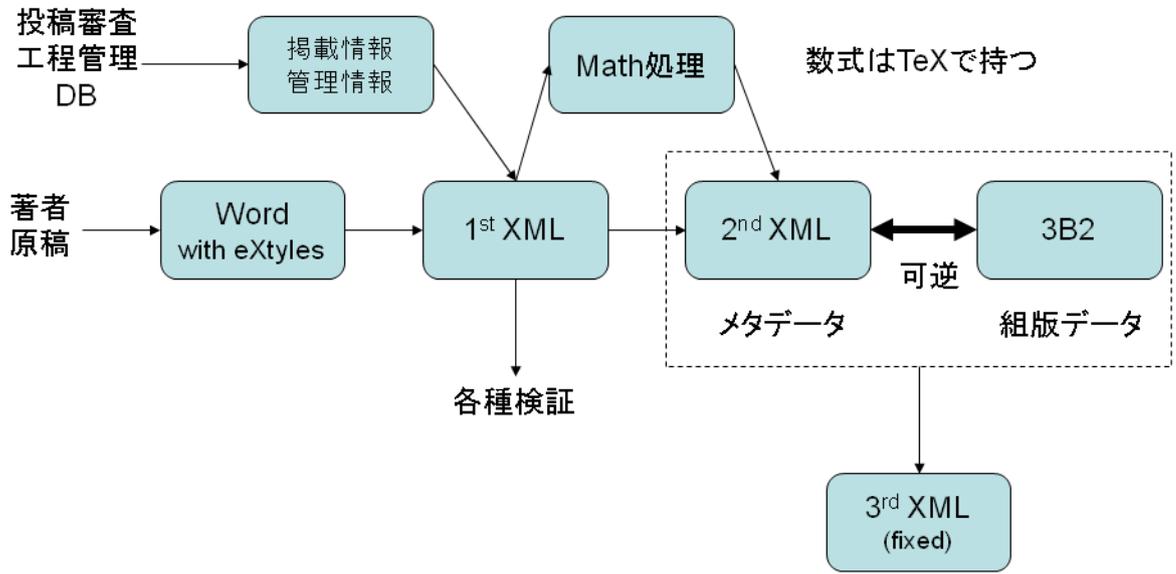
##### (1) From 1989 to 2010 ePubの登場でいよいよSGMLは報われるか

- 1989 SGML 計画
- 1995 html 試験公開
- 1999 e-journal 有料購読(html)
- 2001 再検討
- 2002 TeX-based publication
- 2005 (NLM-DTDの出現)
- 2007 eXtylesの検討開始
- 2008 XML-based publication (from 2009 issue)
- 2010 ePub, 全文xhtml 試験公開

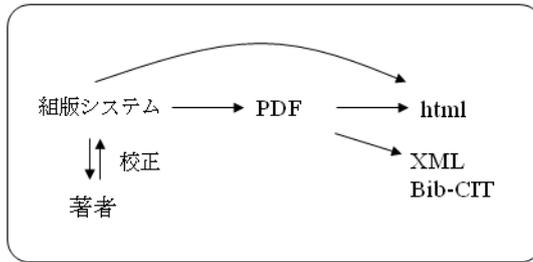
「日本の電子ジャーナル製作に関する諸考察と,NLM-DTD XMLを利用した電子ジャーナル出版」  
(情報管理, 2009-03, 51, 12, 902-913)



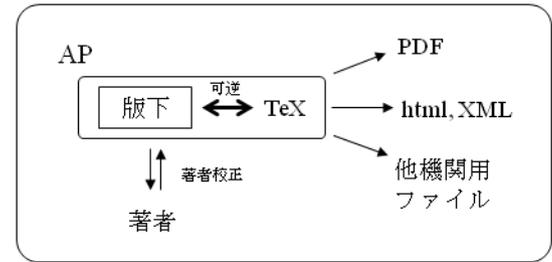




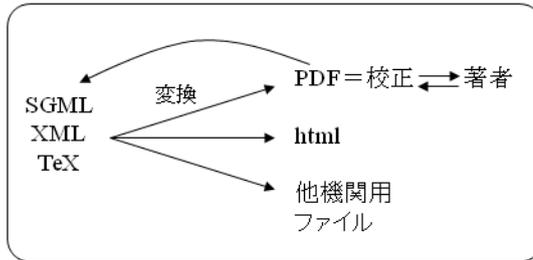
(2) ワンソースマルチユースの理想と現実



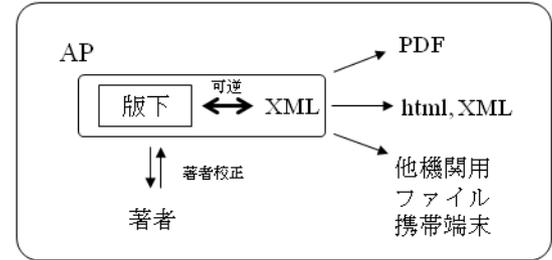
日本の主な電子ジャーナル用データ作成手法例



TeX-APシステム(2002-2009)



ワンソースマルチユースの概念図と実際



XML-APシステム(2009- )

AP=Advanced Publisher (Arbotext)

### (3) 英文誌—和文誌問題

- 日本の英文誌は欧米の学術誌(=英文誌)に遅れないために早めに対応してきた側面 → 英文誌の経験とノウハウを和文誌に生かせば良い
- 技術的な問題より、社会的な問題。
  - ePubをどう作るかという問題では決してない。
  - どのようにしてXML(メタデータ)を効率良く作成するか
  - できたデータをどのように流通させるか(iBooks)
- 英文と和文ではやり方が違う

日本の電子書籍対応の現在

## B) モバイル対応

### (1) ジャーナルタイトルからの離脱: 個々の研究者に個々の論文を届ける

- 雑誌によっては、各論文の1ページ目にジャーナルタイトル、出版社ロゴとカバーピクチャーを印刷している。

### (2) 本物の波か？

- ハイプサイクルのどこに居るか  
<http://www.atmarkit.co.jp/aig/04biz/hypecycle.html>
- フラクタルな側面
  - ハイプサイクルの中のハイプサイクル

### (3) 会員情報サービスとしてどう捉えるか

雑誌を図書館経由での購読の場合

- 形式的、事務的なサービスの相手は主に図書館、企業の図書室: 論文誌の1つの特徴
- 個人購読もあるが、電子ジャーナル化で図書館がゲートウェイ化

モバイルの場合は発信側が直接利用者へ情報を届ける

- 直接利用者へ届ける情報は論文誌だけではない
- 会員サービスとしてのモバイル情報配信の在り方を考える必要性 会誌 (Magazine)、年会、イベント情報

学会の情報発信戦略自体の練り直しが必要

- 今の日本の学会にその体力があるか。

## C) 学会の存在意義

### (1) 誰が学会を運営するのか

- 学会は研究者がいる限り無くならない
  - 運用の担い手が変わるかも？
  - 既存の学会自身の進化？大手出版社？図書館？
  - 中心は研究者自身
- 大手商業出版社の学会機能化の可能性
  - 電子投稿査読システムのポテンシャル
  - 投稿者、編集委員、査読者の情報が手の内に
  - E社はそれに加えて論文のパフォーマンスも手の内に
  - ネットワーキングのサポート
  - Webに最適化したネットワーキング、SNSの活用など
  - 雑誌のブランディングで培った人脈をプラス
  - モバイルを利用して個別に情報サービス
- 
- (「第143回三田図書館・情報学会月例会「学術情報の発信と流通の将来像:『『大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について』:審議のまとめ』を受けて」 CommentsAdd Star」 <http://wwwsoc.nii.ac.jp/mslis/monthly09.html>)

### (2) 学会とは

- 同じ学問を専攻する学者が、研究上の協力・連絡・意見交換などのために組織する会。(三省堂 大辞林)
- 学会(がっかい)は、学問や研究の従事者らが、自己の研究成果を公開発表し、その科学的妥当性をオープンな場で検討論議する場である。また同時に、査読、研究発表会、講演会、学会誌、学術論文誌などの研究成果の発表の場を提供する業務や、研究者同士の交流などの役目も果たす機関でもある。

(中略)

中世 - ルネサンス期のヨーロッパで、保守的な大学に反発した知識人が各々で集まって情報交換を始めたのがその起こりである。最も初期の自然科学分野の学会は、1660年に設立されたイギリスの王立協会である。アイザック・ニュートンを始め、第一線級の科学者が集結した。

# 参考文献

http://www.refworks.com/refshare/?site=01002978325200000/RWWEB101352317/sparc\_japan\_20100623

The screenshot shows the RefWorks RefShare web interface in a Mozilla Firefox browser. The page title is "RefWorks RefShare -- Single User Site". The URL in the address bar is "http://www.refworks.com/refshare/?site=01002978325200000/RWWEB101352317/sparc\_japan\_20100623". The interface includes a search bar, navigation menus, and a list of references. The references are displayed in a table-like format with checkboxes for selection and "View" links for each entry.

**RefWorks RefShare -- Single User Site**

Search RefShare [Go]

All References Switch to: Standard View

References to Use:  Selected  Page  All in List

Sort by: Authors, Primary

Add to My List Print Export Create Bibliography

Go to Page: 1 2 Next Last

<input type="checkbox"/> Ref ID: 40	Journal Article (Electronic) Reference 1 of 27	<a href="#">View</a>
Title:	Scholarly Communication in China, Hong Kong, Japan, Korea and Taiwan	
Authors:	<a href="#">Hayashi, Kazuhiro</a>	
Source:	<a href="#">Learned Publishing</a> , July 2009, 22, 243-243(1)	
<input type="checkbox"/> Ref ID: 42	Journal Article Reference 2 of 27	<a href="#">View</a>
Title:	化学系を中心としたジャーナル合同プロモーション 海外の研究者に日本のジャーナルの宣伝をした2年間の報告	
Authors:	<a href="#">山下和子</a> ; <a href="#">林和弘</a>	
Source:	<a href="#">SPARC Japan news letter</a> , 2009-02, 1, 1-4, 国立情報学研究所	
<input type="checkbox"/> Ref ID: 39	Journal Article (Electronic) Reference 3 of 27	<a href="#">View</a>
Title:	日本化学会論文誌の最近の動き	
Authors:	<a href="#">日本化学会学術情報部門</a>	
Source:	<a href="#">化学と工業 = Chemistry and chemical industry</a> , 20030201, 56, 2, 146-149, 日本化学会	
<input type="checkbox"/> Ref ID: 35	Journal Article (Electronic) Reference 4 of 27	<a href="#">View</a>
Title:	論文誌の電子ジャーナルをめぐる最近の動き ([科学技術動向]100号記念号)	
Authors:	<a href="#">林和弘</a>	
Source:	<a href="#">科学技術動向</a> , 2009/7, 100, 10~18, 文部科学省科学技術政策研究所科学技術動向研究センター	
<input type="checkbox"/> Ref ID: 3	Journal Article Reference 5 of 27	<a href="#">View</a>
Title:	集会報告・Online Information 2008 - STMTセミナー (E-Production Seminar, Innovations Seminar)	
完了		